

# 25PB-am153

## ダビガトランのプロテイン S 比活性測定に与える影響

○中島 明日菜<sup>1</sup>, 明吉 祥花<sup>1</sup>, 市山 朋樹<sup>1</sup>, 高崎 伸也<sup>1</sup>, 隈 博幸<sup>1</sup> (長崎国際大薬)

[目的] 抗凝固システムの一つであるプロテイン C/プロテイン S 凝固抑制系 (APC) の異常により血栓症が生じる。特にプロテイン S には I 型 (量的) 異常および II 型 (質的) 異常の 2 種類の異常があり、プロテイン S の量および比活性を正しく評価することが重要であるために、我々は以前プロテイン S の比活性測定法を確立した。血栓症患者では、治療薬としてダビガトランエテキシラートメタンスルホン酸塩 (プラザキサ) などの抗凝固薬を服用していることが多いため、そのような場合においても、プロテイン S の比活性を正しく測定できるかを調べた。

[方法] 健常人の血漿に最終濃度が 0 - 1000 ng/ml となるようにダビガトランを加えインキュベートし、プロテイン S 比活性測定法により測定した。

[結果および考察] ダビガトランエテキシラートメタンスルホン酸塩 110 mg カプセルを経口投与した時、得られる代謝産物のダビガトランの最高血中濃度 (94 ng/ml) より濃い 100 - 1000 ng/ml のダビガトランを *in vitro* で血漿に反応させても、図のように、プロテイン S 比活性測定に影響を与えないことを確認した。このことよりダビガトラン服用患者においても、その影響を考慮することなく、プロテイン S 比活性測定法を用いることができると考えられる。

